

京都が「失われゆく日本の顔」というなら、祇園をはじめとする花街は「京都の顔」だ。その花街を統括するのが京都花街組合連合会。明治維新のとき、薩長土肥の志士たちを優遇し、芸妓たちの数々のエピソードを残している祇園も、激しい時代の流れの中でその伝統と歴史をたちきられる危機にたたされてきた。地価高騰の波にさらされて、つぎつぎと消えていく町並みと情緒。芸・舞妓の不足。邦楽邦舞のお座敷文化の継承。「祇園は動く文化。花街に住む私たちは、文化遺産の守り人」として連合会では延命策を模索している。

組織の概要

●住所 ○〒605京都市東山区祇園街南側、弥栄会館内 ●設立年月 ○昭和二十二年三月 ●組織活動内容 ○風俗営業の連絡・調整、税務相談、舞・芸妓の確保 ●予算高 ○約二〇〇万円 ●事務局員数 ○一名 ●舞・芸妓数 ○舞妓五七名、芸妓二三八名 ●茶屋数 ○二二軒（いずれも平成元年四月現在）

学校法人組織を基盤に 六花街の茶屋組合を統合

京都花街組合連合会



祇園新地甲部



宮川町



先斗町



上七軒

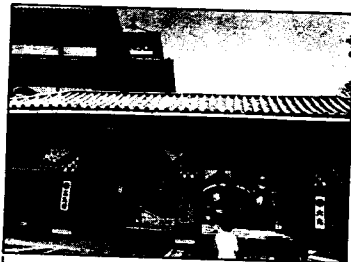


鳥屋



祇園新地東

京都花街組合連合会



①



②

- ①都をどりなどがおこなわれる祇園甲部歌舞練場の正面。
- ②同連合会の成果が発表されるひのき舞台となる祇園の街並み。

花街に伝承された 日本の芸能文化を守る



●連合会会長○明治四一年、京都府生まれ。旧制東山中学校中退後、大阪の織維商社に勤務。昭和九年に家業のお茶屋を相続。二十四年、同連合会会長に就任。二十九年、祇園新地甲部お茶

屋組合取締になり、五七年に同組合相談役に。学校法人八坂女紅場学園理事長、祇園甲部歌舞会総務、京都花街国民健康保険組合理事長、京都市観光協合理事。京都市地裁法務委員。

京都に集まる芸妓を受入れ

昭和二二年三月、祇園新地甲部、祇園新地東、先斗町、宮川町、上七軒、島原の六花街で京都花街組合連合会を発足させた。戦災をまぬがれた京都には東京、大阪から芸妓やお茶屋の経営者が集まってきた。京の各花街では、それぞれつながりの深い各地の花街から芸妓がおしよせ、連合会としてその受け入れの調整機能をはたすためだった。同時に芸能を振興させ、芸妓たちにもその心構えの向上につとめるようにはかった。もちろん、行政側からの依頼を受けて各花街間の連絡、調整もあつた。

それぞれの花街には特色がある。「応接間が祇園、茶の間が先斗町、離れ座敷が上七軒で、自分の居間は宮川町、懐古趣味には島原」(渡会恵介著「京の花街」といわれ、連合会としては、実際のところ、合同の舞踊会をもよおす程度で、各花街を側面的にバックアップしてきた。

高まる芸・舞妓の風格

京の花街の中でも、格式の高さと規模の大きさをほこる祇園は時代の先取りをしてきた。明治維新以来の伝統として、たくみに行政の支援を得てきた。祇園で優遇した勤皇の志士たちが明治政府の高官になったのだから、祇園にとっては笑いがとまらない。祇園の「都をどり」にしても、博覧会の余興としてはじまった関係もあり、京都府の行政的指示にもとづいたものだった。さらに中央当局も、祇園を営利本位でなく、公共のための存在とみなした。明治、大正の近代的な制度化の下で、遊廓が全国的な統制を受けるなか、祇園の芸・舞妓の特殊な性格と風格も認められてきた。

文化財としての芸の伝承

中島京都花街組合連合会会長は全国の主だった花街関係者によびかけて、五六年二月、

「組織リーダーに学ぶ」

花街を守る 「先人の残してくれた父親的存在 この花街をみんな、誇りに思っています。もうけ主義だったら、おそらく花街の灯は消えていたかもしれません。おだやかな口調で、説くように語る。

祇園の「お父さん」というほうが京都ではとおりがいい。祇園生まれの祇園育ち。昭和九年、母が亡くなり、お茶屋の老舗「房の家」の三代目となる。翌年には二十七歳で、お茶屋組合の役員に就任。戦後、「一力事」の二一代目当主、杉浦治郎右衛門取締に手腕をかわれて副取締になり、連合会結成に尽力してきた。歌舞練場を接収していた進駐軍との返還交渉にあたり、スゴ腕を発揮した。

芸・舞妓不足について「かつて地方に話をもっていたが、ダメだったね。祇園ではなによりも芸が好きでないとつづかない。それにある程度辛抱しなくちゃいけないし…。伝統の中でたえず、新しい血を求め、文化継承していくことはむずかしい」としみじみ語る。五六年二月、芸妓さんたちの社会的地位の向上をはかる「全国芸妓芸能文化財連盟」の設立にこぎつけた世話人でもある。「芸妓さんは長唄、常磐津などの芸能の伝承者として、大

全国芸妓芸能文化財連盟を発足させた。長年、芸道一筋につくしてきた名妓を無形文化財なみの「芸能文化財」に指定することで、後進にはげみをあたえ、芸妓の社会的地位の向上をはかってきた。すでに一〇年目を迎え、毎年開いている全国花街による合同発表会もすっかり定着している。

芸妓の世界は古いしきたりが根強く残っていて、それがまた一つの魅力になっている。それだけに近代化への脱皮ができず、現代の若い女性に敬遠され、後継者不足をかこっているのが現状だ。その一方で、長唄、常磐津、清元という邦楽や各流派の踊りなど日本古来の芸能の世界では全国の芸妓が伝承者として大きな役割をになってきた。京都では外国からの国賓、公賓などの接待にも欠かせない存在だ。そこで、同連盟ではキャリア、人格、芸ともにすぐれた芸妓を選び、「芸妓芸能文化財」に指定、老後は報奨金を支給している。中島会長は「芸妓にも誇りとはげみができるうえ、減少している芸妓たちにすこしでも歯止めをかけた」という。

祇園の文化遺産を守る

京の花街に急速な大衆化、企業化の波が押

しよせている。お茶屋文化を支えていた室町、西陣などのダンナ衆がだんだん少なくなっていく。日本経済の成長とともに、祇園の客層も変わり、お茶屋のツケも社用経費でおとしたり、接待もおのずと規模が大きくなり、お座敷の小空間ではまにあわなくなってきた。お茶屋の経営も個人から会社組織になり、女将さんも月給とりのところがめつきりふえてきた。

客も年代が若くなると、お座敷遊びや芸妓を相手にするのが苦手だ。おちついた、味わいのある芸についていけない。町なみの景観も変わり、バーが入った雑居ビルも林立し、大衆化の波のエネルギーは、祇園の伝統を花街気質の美徳をもぎとっていくかのように見える。中島会長は「いま生きている芸・舞妓やお茶屋を一番に大切にしたい。そして祇園情緒や文化遺産をどこまでも守り育てたい」とひたすら守りの姿勢を固める。「時代祭、祇園祭などに全花街をあげて参加して市民に愛されている。日本文化の粋がここにあります。芸術家としての芸妓を育てていきたい」。ふたたび祇園文化に熱いまなさがそそがれることを信じている。

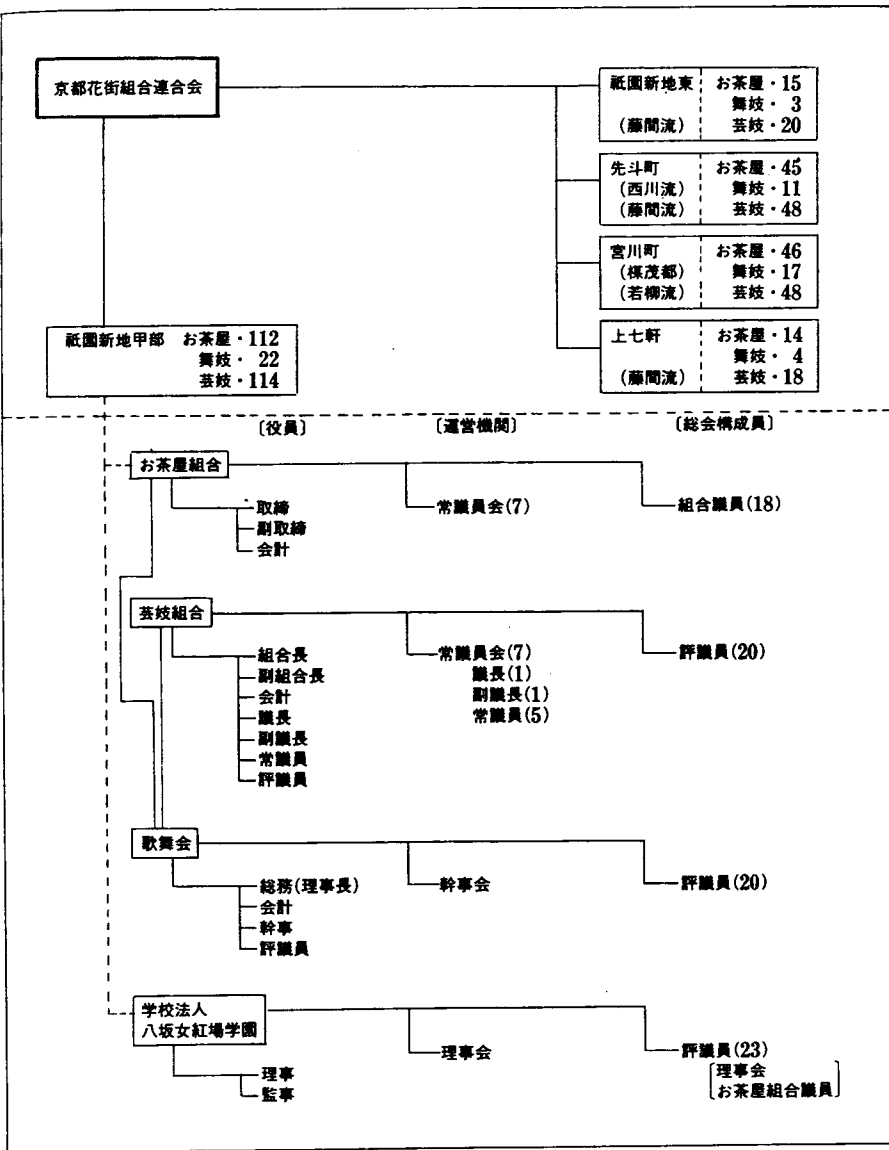
きな役割をはたし、教養もある。すこしでもイメージアップをはかりたい」といい、祇園への愛がにじみでる。

邦楽、茶道をつうじて全国各地の人間国宝や文人たちとの幅の広い交際。古美術への造詣も深い。「現在働いている人たちを大事にしていきたい。みんながそれぞれ後継者になる人を一人ずつ探してくればやっていける。団結して若い人を養成し、連合会としてできるかぎり相談のついでいきたい」と会合のたびに強調している。

花街の世話ぶりがかわれ、二七年から京都地裁の調停委員になった。以後、ずっと多くの人生にかかわってきた。「健康のつづくかぎり社会のお役にたちたい」と、祇園に生きる男衆の意地を見せている。

祇園新地甲部お茶屋組合の 組合電話網ネットワーク

連合会としては、あくまでも各組合の連絡、調整機能をはたすことに主眼をおいている。こゝでは、その中の最大の組織、祇園新地甲部お茶屋組合を中心にする。お茶屋組合と芸妓組合が相互に連絡しあつて歌舞会や学校を維持しながら花街の存続をはかっている。



(H1)

地域を一つの建物とみなす私設電話網
四〇年、祇園地域内に組合電話網を設置した。「地域全体を一つの建物」とみなしてもうけたネットワークで、お茶屋と置き屋など二〇〇軒を結び、芸・舞妓さんのよびだしにすぐ応じることができた。当時の電気通信関係の法の盲点をついたもので、国会でも一時問題になったが、いまでも存続している。

「そのころ、電話がなかなか設置できず、おちよぼさんとよばれる小間使いが花街を走りまわって連絡していた。当時の金で一五〇〇万円ほどかかったが、いまは維持費用もほとんどいらぬし、助かっています」と中島会長はいう。

京都花街国民健康保険組合
芸妓たちの生活を保障するために三一年四月、京都花街国民健康保険組合を設立。芸能人の健康保険組合はあるが、花街として組合をつくっているのはここだけだ。現在の加盟組合員数は芸・舞妓、お茶屋の五五一一人、その家族を含めると八七五人である(平成元年四月現在)。

現在)。

茶屋組合の復活・脱退に二喜二憂

伝統の廓・島原の脱落

島原名妓の
伝統断絶

京の六花街の一角をしめていたわが国最初の廓、島原は芸妓の減少などを理由に昭和五一年、連合会から脱落した。いまは観光客のためのショー化した「太夫道中」や、「角屋」という重要文化財の家屋があるところくらいイメージしかない。寛永一八年(二六四二)、現在地に急速移転を命じられたさい、廓の中であわてぶりが「島原の乱」に似ていたからとか、その構造が天草の城壁に似ていたことから、島原とよばれるようになったという。

古い格式をはこる花街だけに、華やかな年中行事も各月にあったが、いまは記録に残すだけになった。観光バスもタイアップした「夜の観光コース」で、映画のセットのような角屋の離れの間で、客が太夫の品定めをする儀式「かしの式」を見学したり、さしかけ傘に二人の禿(かむろ)をしたがえて八文字をふん

で練り歩く「太夫道中」に浮世絵そのままの世界をかい間見れるだけだ。吉野太夫という名妓らを輩出し、歴史の中で栄華をきわめた島原は「夢の跡」となった。

北野舞踊学校の
設立

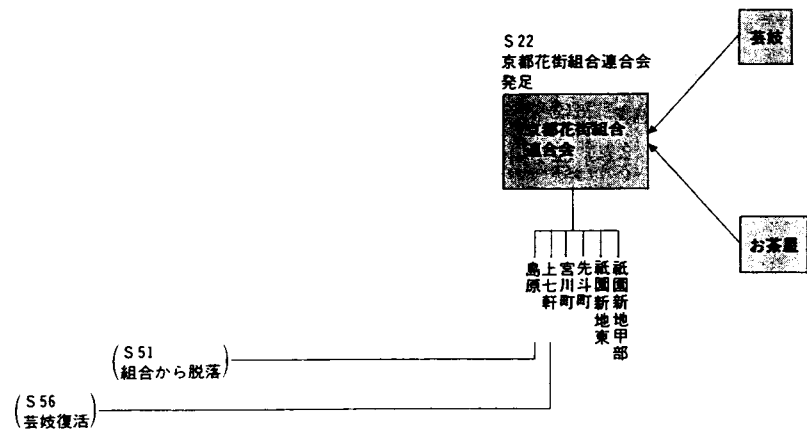
少数の芸妓がいるだけで、約二〇年間にわた

って舞妓がいなかった上七軒で五六年、ひさびさの舞妓が生まれた。東京・丸の内の〇Lからの転身者で、いわば脱サラ女性版だ。上七軒北野天満宮東門前に位置し、近くの西陣のダンナ衆たちの社交場として栄えてきたが、花街としての華やかさが消えかかっていたときだけに、すっかり時の人になった。

芸どころとして自負してきた上七軒は、ちよつとした元気をとりもどし、京の花街の歴史から見ても、驚天動地の話題だった。舞妓は現在四人。恒例の「北野をどり」も踊り手を確保するのが大変だったが、「北野舞踊学校」を発足させ、ここの生徒が芸妓に混じって舞台をいろうどる。たまに生徒の中に芸妓志望者が出てきて関係者を喜ばせている。

甲部お茶屋組合では、昭和初期に四二二軒あったお茶屋がいまでは一一二軒に、芸・舞妓は六九〇人から二六六人に減少した。女性が幅広い仕事に進出、芸・舞妓の激減が致命傷になって花街情緒はさびれる一方だ。人材確保が危機をのりこえるかきた。

花街組合連合会の変遷



システム

学校法人の土地内に 営まれる花見小路の茶屋活動

祇園をはじめ京都の花街は接客や運営にあたって独自のシステムを採用している。組合管理、一見さんお断り、都をどりのイベントなどである。大衆化、レジャーの多様化といえ時代の波が押しよせる中で、それは伝統に守られてきた文化のありようを示している。

教育システム

八坂女紅場学園の活動

学校法人所有地としての祇園

何をするにも花街では、組合が中心になってい

る。甲部を例にとつてみると、組合の決定権はあらゆるところにおよぶ。花代の改正、芸妓組合との交渉、毎月の花代の集計、借地料の値上げ、お茶屋営業の認可、芸・舞妓やお茶屋の売花奨励賞の審査、組合電話の管理、税金申告の指導、芸妓手帳の発行、芸・舞妓のスカウト……。いわば「花街の心臓部」としての機能を果たす。

とくに四条通り南側の祇園・花見小路一帯の土地約六六〇〇平方メートルは、学校法人八坂女紅場学園の土地として、組合で管理している。明治初期、組合の前身である「貸座敷組合」ができたとき、土地を府から提供されたという。お茶屋の大半は、学園に毎月、借地料を払っている。組合と茶屋はいわば、

家主と店子の関係。お茶屋が座敷を増改築しようにも、勝手にできず、庭にホームバーをつくるにも、別に組合の許可と地代を支払わないといけない。

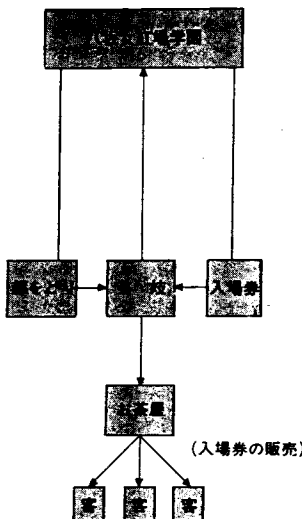
京都でも地価が急騰しているが、祇園のお茶屋がもつ地上権が高価格で取り引きされるケースもあるが、組合では「地主としては変な建物は決して認めません」と強調。そのためおちついた町なみを維持できている。

歌舞芸能の教育と
学芸会の発表

学校法人八坂女紅場学園は、ユニークな学校

だ。祇園のお茶屋がならぶ広大な土地を所有し、たとえ老年であつても、ここで芸妓であるかぎりは、終身、この女紅場の生徒。女紅場とは、中国の古典にある女性の芸能を意味する熟語。祇園女子技芸学校をもうけ、祇園新地の全芸・舞妓に歌舞などの教育をおこなう。芸妓たちは長唄、地唄、小唄、能楽、常磐津、清元、華道、浄瑠璃などの科目の中から最低二科目を選んで、精進する。
明治五年、春の博覧会の「付博覧」（余興）と

八坂女紅場学園「都をどり」運営システム



してはしまった「都をどり」はこの学校の学芸会だった。「都をどりは、ヨイヤサー」のかけ声ののって、春爛漫の京都の四月、祇園新地歌舞練場でくりひろげられるこの「都をどり」は、「チェリーダンス」として外国人にも人気を集め、今も期間中、一二十万人もの観客が詰めかけている。入場券は、「学芸会」という名目もあつてか、出演者に割りあてられる。芸妓は割りあてられた入場券を、お茶屋にもつていく。お茶屋はこれをひいきの客にさばく。芸妓の数がへつっているだけに、さばくのも結構たいへんだ。

また毎年、秋に開く温習会は、京都の粋などを披露する発表会で、同時に各自の技能を考查した。営利事業の芸・舞妓の営業だが、芸能育成という公共性が認められて、明治三五年に八坂女紅場は財団法人になり、現在は学校法人になっている。

接客システム

京都商家の応接室

一見さんお断りの
高い敷居と格式
「一見さんお断り」をかたく守っている。いきなりお茶屋にいても、あがらしてもらえない。しかるべき人

の案内か紹介がいる。そのほこりの高さはそのまま敷居の高さにつながり、観光客などはしらけた気分になる。しかし、お茶屋にいわせると「いつもつきあいのある客を大事にして、お座敷をあげてまつている。満員ですと平気でなじみ客をことわるような東京の料理屋の真似はできない」という。

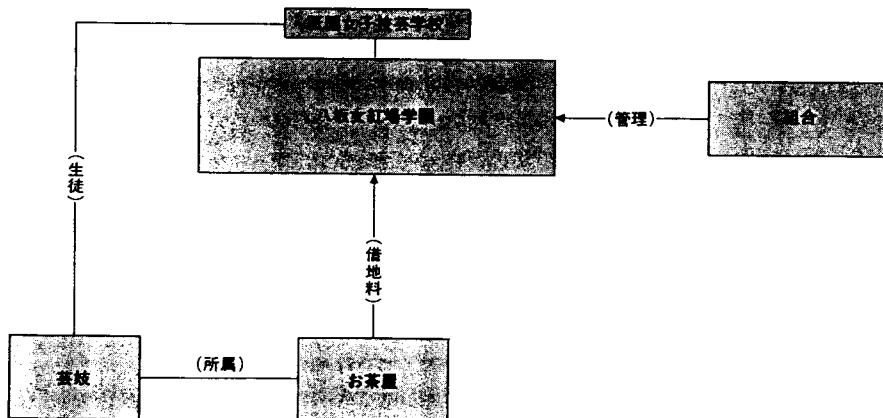
しかし、最近では、お茶屋の隙間をぬって観光にきた一見客にも門戸開放の小料理店、スナックが続出して、お茶屋はじわじわと危機にたたたされている。

花代と
会計システム

芸妓をよんだときの花代は、お茶屋組合と芸

妓組合との協定で決まっている。甲部の場合一本が五分単位で、一時間一二本、三二八円（税込・平成元年四月現在）となっている。とはいももの、このほか宴会花、約束花やご祝儀などがつき、会計は複雑だ。これを芸妓、お茶屋、組合が分けあうことになっている。これに飲食代がプラスされる。お茶屋は貸座敷で、料理はほかへ注文するのがタテマエで、ほとんど実費程度である。「料金は世間で考えるよりもずっと安い。変なバーにいくのにくらべたら、ぐんと安上がりですよ」と組合はいう。

祇園新甲部における組合運営システム



ダイナミクス

お茶屋営業への 独立の道の模索

崩れる伝統社会

踊り、三味線、お座敷の礼儀作法と芸妓の養成はたいへんだ。甲部の場合は、京舞の井上流のみ固守している。無形文化財の井上八千代さんの指導を受け、それ以外の師匠にはつかない。昔風にみっちり芸をしこむと、若い女性には「こんなにシンドかったら、やめますわ」とさっさと廃業しかねない。稽古事に精を出すよりも、スナックホステスになるほうがてっとり早い。

「もともと芸妓が舞妓になって、祇園の伝統も守られてきた。しかし、いまは舞妓にならないし、芸妓もあまり生まれませんね」とあるお茶屋の女将はいう。

スナックとの共存

芸妓は「自稼制」がほとんどで、マンションに住み、祇園に通う芸妓もおおい。新地の

内でないとい、名を掲げられないため、自宅から「店借料」を支払っている置屋に出てからお座敷に向かっている。

踊りなどのための着物などの費用がかさむと、ダンナから「そんなにカネがかかるなら、スナックでもやったらどうや」ともちかけることはザラ。芸妓にスナックを経営させれば、その売り上げだけでも、ダンナのフトコロは楽になる。芸妓兼スナック営業のママはふえるばかりである。いつしか、スナック営業のほうに力がいり、お座敷もそこそこの店に帰ってしまう。なかには自分の店に客を誘うために芸妓に出ている傾向もみられる。

中島会長は「芸妓の絶対数が少なくなつたいま、本業のお座敷をきっちりつとめて、とばかりいっておれません。お茶屋をやって独立するには資金がいる。独立精神は認めてます。いまは二次会、三次会にはできるだけお客を送ってやりますよ」という。スナックとお茶屋は共存関係になっている。

京都といえは祇園の舞妓、というイメージが浮かぶ。だらりの帯におこぼ（木屐）割れしのおの髪に花簪（かんざし）の優雅で華やかなその姿が京の街角から消える日がいっつかくるのだろうか。芸・舞妓の養成、祇園の文化、美徳を継承するのは多難だ。

組織史

1641 寛永一六	島原に遊廓移転（日本初の廓）
1902 M三五	財団法人八坂女紅場学園設立
1947 S三二	京都の六花街が京都花街組合連合会を発足
1956 S三三	京都花街国民健康保健組合設立
1965 S四〇	祇園地域内に組合電話網設立
1976 S四一	島原、組合から脱落
1981 S五六	上七軒に芸妓復活

editorial staff

- editorial director ——— 松岡正剛
- editor in chief ——— 高橋秀元
- senior editor ——— 野田努
- executive editor ——— 真島陸
- researcher & writer ——— 吉井藤重郎・上村元覚・村田充八・清部明男・
井上節子・田原由紀雄・池田知隆・藤木稚清・
真島陸・山田繁夫・吾妻博勝・河田烈・
木本正人・千葉幹夫・藤森英明・野田努
- chief designer ——— 木村久美子
- designer ——— 斎藤公子・星野恵美子・百瀬好泰・小川鏡子・
佐々木寿美子・園本真樹子・原岡井薫子・山崎浩美
- associate ——— 木下靖枝・山田洋子・川口照夫

塩原勉

(しおばら・つとむ)

日置弘一郎

(ひおき・こういちろう)

昭和六年、富山県生まれ。昭和二四年、京都府生まれ。京都大学文学部哲学科卒業。同大学院修了。千葉大学文学部教授をへて、現在大阪大学人間科学部教授。社会学、文化人類学、民族学などの議論を統合、組織の普遍的な行動を探究する。

昭和二四年、京都府生まれ。大阪大学経済・経営学博士課程修了。九州大学経済学部教授。専攻は組織構造の多面的国際比較、組織行動の文化的差異を研究し、家元組織を中心に日本の組織の原型を探る。

日本の組織〔第十三巻〕

伝統と信仰の組織

一九八九年九月五日第一刷発行

定価 八二四〇円(本体八〇〇円)

著者代表 塩原勉・日置弘一郎

企画構成 編集工学研究所

発行者 田中富彌

発行者 第一法規出版株式会社

住所 〒一〇七 東京都港区南青山二一十一十七

電話 〇三―四〇四―二三五一

振替 3―133197

ISBN4-474-15113-5 C3360 P8240E(4)

製版印刷 凸版印刷株式会社

©1989 Printed in Japan